

南アフリカで 教育サポートの活動をして

15年度1次隊 南アフリカ共和国
理数科教師
長野県東御市立北御牧中学校
五味房子



まずやったことは、「実験出前」。
学校には少しの薬品や実験器具はあったのですが、
先生方はやり方がわからなかったり、生徒数が多すぎてできなかったりで、授業で実
験をしている先生はほぼ皆無でした。
そこで実験道具や薬品を持って学校へ行き、先生とともに実験をしたのです。
(実験終了後に記念撮影。試験管をはじめ持って持った高校3年生たちです。)



ですが、私たちは車の運転が許可されて
おらず、遠く離れた学校に行くには、教員
センターの車を何とか予約して使うか、先
生に迎えに来てもらうしかありませんでし
た。したがって、近い学校や、先生が車を
持っている学校に偏ってしまいました。

(先生のお迎えを待つ私。1時間遅れ
くらいはザラ。)



生徒たちはとても一生懸命、先生方も、政府から1年で行うべき実験の数が指定さ
れているので、そのノルマが消化できるということで歓迎してくれました。

(力学台車の実験の説明を聞く生徒たち。まさに黒山の人だかり。)



においのある有害な気体の発生する実験は外でやりました。「有害」と聞くだけで
おびえてしまい、少しにおいをかいただけでも倒れてしまう子もいました。
学校中にくさいにおいが流れ、魔女が来たと思われた学校もありました。

(硫化水素の発生する実験を、外で。)



南アフリカでも中和滴定は大人気。でも、実験器具の名前からしてぜんぜん知らず、
やっぱり実際に使って覚えることは大切なんだと実感。
(ホールビペットの使い方の説明。ビベーターがないので口で吸うのですが、勇気あ
る男子生徒が決死の覚悟の面持ちで取り組んでいました。)



(生まれてはじめての滴定、きらきらの瞳。)



生徒数がどんどん増加しているのは大きな問題です。このクラスは、語学の授業中だったとはいえ、なんと70人います。
(後姿は校長先生、全校のクラスに連れて行ってきて紹介してくれました。)



壊れているガラスもそのまま、落ちそうな天井や、屋根がない教室で勉強している学校もありました。
(放課後の教室、比較的設備がそろっている高校の普通の教室。)



突風で校舎が飛び、とりえず荷物を運び込んだ職員室の一角。こうなってしまうと直してもらうのは相当先になってしまう。
(かろうじて残った教室にすし詰めで授業は行われていました。)



時には先生や校長先生に頼まれて、生徒相手に冬期講習などをやったりしました。卒業試験を控えて、生徒の皆さんは必死。
(でも基礎学力が低くて、到底入試問題には太刀打ちできていません。)



突然先生が異動されられ、教えてくれる人がいなくなった学校へ行って授業をしたりもしました。10割る5すら、計算機を使います。
(オームの法則の練習問題を解く高校2年生たち。繰り返し練習の大切さは、この学校の先生には伝わったようです。)



次に力を入れたのは、先生方を集めてのワークショップ。先生方が実験方法を知らない、どころか、指導内容すら怪しい分野がある先生もチラホラ。政府から各地区に配分された実験キットを使ってできる実験を主に紹介しました。
(合力の実験の説明、平行四辺形の書き方から指導。)



さきほどの学校は地区内でも最高級の理科室を持っています。でも、きれいな流しの蛇口からは水が出ません。水を汲んできて、このように流して実験器具などを洗います。
(普段も汲んだ水で生活しているので、とても上手に洗っていて感心しました。)



先生たちもとても一生懸命。でも、授業を自習にしてみてくださいまうことは申し訳ないと思っ、交通手段がなくてこれない先生も多かった。
(上皿天秤の使い方やケンケンゴウゴウの議論、3人も結構なベテランの先生。)



学校はいくつかを地区ごとにまとめてクラスターを作っていて、そのクラスターごとにワークショップをしたりテストを共有しあうなど協力し合っていました。その会議に参加して助言もしました。
(一番近い地区のクラスターミーティング。リーダーさんによって活動にはかなり差があった。)



だんだん名前が売れてくると、自分の担当地区内だけでなく、もっと大きなワークショップでのプレゼンを頼まれたりもした。大勢だと実験をみんなにしてみらうわけにもいかず、しゃべりで伝えなくてはならないので大変だった。でも先生たちは熱心に聞いてくれた。
(私の変な英語を必死に聞いてくれている先生たち。)



特に物理の実験にはみんな苦しんでいた。波を視覚的にとらえる実験、なんとも理解に苦しんでいる様子だった。
(ただですら英語が足りないのに、なんと説明したらよいやら…)



配属された教員センターは昔教員養成大学として使われていて、実験室には大量の薬品や実験道具が山と詰まっていた。中には地域の高校に配られるべきものも多く、全部あけて中身を確認する作業も最初になりました。(何年も放置された硫酸のふたなどは腐食して危険な状態でした。まさに宝の持ち腐れ状態。)



近所の子供たち、私の親友であり、英語や現地語の先生。



とてもお世話になったご家族、本当の家族のように大切にしてくれた。



教員センターの同僚のおばちゃん。最初はなかなか心通わせられなかったけれど、最後は本当にいい友達になった。



一番一緒に苦労した、同じ地区の Physical Science のCIたち。人種も考えも知識もモチベーションもまちまち。でもいい人たちだった。

(一番左のインド人の方が、私のカウンターパートのサムエルさん。)



最後のワークショップに来てくれた先生たち、お別れのセレモニーや、贈り物をくれた。いろいろな人がいたけれど、優しい人たちだった。



毎日見ても飽きなかった夕日。美しい自然と、暖かい人たちに心から感謝！